



平成22年1月25日

卓話 『アートの起源』

現代美術作家

杉本 博司 様

杉本博司でございます。私の作品がオークションで1億円で売れたというお話がありました。私がそれを買ったわけではありません。お持ちになっていたコレクターが1億円で売ったということで、私はその5年前に600万円で買って、製作費が300万円ほどかかりました。スタッフに給料を払うと利益はほとんどゼロですので、お間違えのないように。

森美術館で5年前に大掛かりな「時間の終わり」という展覧会をさせていただきました。もともとワシントンの国立ハーシモン美術館と森美術館の共催で北米巡回展を企画したのですが、それが縁になって、高松宮殿下記念世界文化賞をいただくことになりました。

私が世界に知られるようになったきっかけは「海景」というシリーズで、1980年にカリブ海、ジャマイカで撮ったものです。アートの起源とは、考えてみれば人間の意識の起源と同じではないか。なぜ人間が生きていて意識があるか。意識が人間に芽生えてくる頃の古代人の意識はどういうものだろうか、その当時の人間が見ていた風景はどういうものだろうかということを考えて、恐らく何百万年もほとんど変わらない海の風景、海景を、初めて地球上に生まれた人類の一人である自分が見ると思いなして、撮り始めたわけです。

古代人のメンタリティーに帰れるかということ。これを建築的な要素で実験できないかということで、2カ月ほど前に開館した伊豆フォトミュージアムで、建築設計と造園と、開館記念展も自分でやろうということになりました。そこでは古墳時代の石組が自分で実際に作れ

るかという研究をしています。石組は一石一石を積んだものです。大きな石は割ったものではなくて、岩盤からはがれた石を持って来るんですけれども、偶然に石室のようなものまでできてしまいました。

ここに眠ると折口信夫の「死者の書」にあるように、冷たい滴がヒタヒタッと落ちてくる感じが分かるわけです。この中には勾玉や管玉、古代ガラスなどの自分のコレクションで、普段から眺めつ、すがめつして、古代の息吹を自分の中に移植しているものを置いています。

伊豆フォトミュージアムでは仮面もコレクションしています。古代のメンタリティーが人の顔に宿る。人間の心が発生して、心と顔が別に動くようになったのが人間の意識の面白いところで、顔が、思っていることを裏切るような演技をするようになる。そういう演技ができるようになった人間に、もう一回お面をかぶせて、二重虚構性を語ろうというわけです。

タルボットの初期のネガをプリントするという実験もしています。写真の発明家のフォックス・タルボットが1840年代に作ったネガがありまして、タルボット自身も焼いてなかった。それを買って写真史に残るものを初めて焼いてみるものです。

この辺で終わりにさせていただきます。
ありがとうございます。

